The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	母子関係の存在論的分析
Author(s)	中山, 康雄
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2016, 42, p. 291-307
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

母子関係の存在論的分析

中　山　康　雄

目　次

１．はじめに
２．生物に関する機能とシステム概念
３．種を存続させるための戦略
４．有胎盤類の母子関係の存在論的分析
５．人間の母子関係の存在論的分析
６．子を失う喪失感
７．結論的考察

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 42;291-307（2016）

母子関係の存在論的分析

中　山　康　雄

1．はじめに

母と子の関係は、一体であったものが分離する過程を含んでおり、存在論の観点から興味深いものである。本稿では、システム概念を導入することによって、出産後からはじまる母と子の分離プロセスが連続的であることを示したい。この連続的過程はまた、進化論的観点からも重要なものである。哺乳類は、未熟な子を少なく産み手厚く子育てを行うという戦略をとることによって種を存続させる動物である。そこでは強い母子関係が成立し、子育ての期間は母親と子どもが完全には分離していない状態を表していると考えることもできる。そして、人間における母子関係も、哺乳類における母子関係の一ケースとして捉えることができる。

本稿では、母子関係をひとつのシステムとして捉え、子どもの発育にともなうそのシステムの時間的変容を哲学的存在論の観点から分析する。

2．生物に関する機能とシステム概念

まず、本稿の分析に必要な二つの概念を規定することから出発したい。その二つの概念というのは、機能概念とシステム概念である。

2-1. 機能概念の規定

生物学の哲学では、機能概念の規定が重要な意味を持っている[1)]。そして、生物の機能概念についての有力な理論には二つのものがある。それらは、ロバート・カミンズが提案した機能についての傾向性理論（dispositional theories）とルース・ミリカンが提案した機能についての起源理論（etiological theories）である（Cummins 1975, Millikan 1989）。カミンズの機能分析によれば、「ｘがそれを含むより大きなシステムＳの中でＦとして機能するのは、ｘがＦとして機能することにより、Ｓがある一定の能力Ｇを持つことができるという因果的な役割を担っていると分析的に説明できるとき」である（Cummins 1975; 長坂 2014: p. 233）。カミンズの傾向性理論が「ｘがＦとして機能するとはどういうことか」という問いに答えようとする理論であるのに対し、ミリカンの起

源理論は「xが機能Fを持つということはどういうことか」を説明する理論である（長坂 2014: p. 234）。つまり、傾向性理論と起源理論は生物に関する機能を異なる観点から説明する理論であり、そのため両者は両立可能である。

ミリカンが提唱している機能概念は「固有機能（proper function）」と呼ばれるものであり、それは次のように要約できる：「あるものの固有機能とは、そのものがある働きをすることによってそれが属する全体のシステムの存続に貢献し、それゆえそれ自身も選択されて存続することになったような働きのことである」（信原 2007: p. 343; 長坂 2014: p. 234f）。実際にミリカンが与えている「固有機能」の特徴づけは、次のように再帰的なものである（Millikan 1989: p. 288）。

(1) Aがある機能を固有機能として持つためには、次の二条件のうちのひとつが成り立つことが必要（そしてほとんど十分）である。

(1a) Aは部分的には複製された性質を持つがために過去において実際にFを実践したあるもののあるいは複数のものの「複製」として発生したのであり、かつ、Aはこのあるいはこれらの実践のおかげで（因果的歴史的な意味での「おかげで」）存在している。

(1b) Aは、その状況が与えられているときに、固有機能としてFを実践したある先行する装置（device）の産物として、そして、これらの状況においてAのようなものを産出することによって普通Fを引き起こすような装置の産物として、発生した。

例えば、肺は呼吸のために発生し、心臓は血を身体に循環させるために発生した。だから、呼吸は肺の固有機能であり、血の循環をうながすことは心臓の固有機能である。ある個体において心臓が血を送り続けたおかげで、その個体の存続が可能になり、子をもうけることができ、その子の心臓がその子の身体で血を送ることができたのである。

生物個体には、生物個体の限界を超えて、種を存続させるための機能が内蔵されている。例えば、哺乳類の有胎盤類では、胎盤は胎児と母体との物質代謝を行う固有機能を持っている。そして哺乳類の乳房は、乳児に母乳という栄養を与える固有機能を持っている。

2-2. 持続的システムの概念と階層的システムの概念

傾向性理論でも起源理論でも、機能の規定の中に「システム」という用語が現れる。肺のような内蔵の機能について語るときに前提にされているシステムは、人間の身体ということになる。この節では、このシステム概念を明確にすることを試みる。私はかつて、「社会組織」の概念や（中山 2011b）「拡張された行為主体」の概念を四次元的（時空的）個物として定義した（中山 2011a; Nakayama 2013）[2)]。ここでは、それと類似した仕方で「持続的システム」の概念を定義しよう。持続的システムは、世代交代を超えて存続

するシステムのことをここでは意味している。

(2a) ［システム］ システムは四次元的個物であり、（四次元的）部分を有し、構成部分の活動をもとに自らの活動を維持している。したがって、システムの時間的部分（temporal part）について語ることができる。
(2b) システムは活動している。また、活動しないシステムは存続できない。
(2c) ［階層的システム］ ひとつのシステムは、その（四次元的）部分として別のシステムを含みうる。このようなとき、上部のシステムを「階層的システム」と呼ぶ。
(2d) ［持続的システム］ 持続的システムは、部分の消滅や部分の入れ替えを超えて存続するシステムである。

この規定によれば、生物個体も細胞もひとつのシステムである。また、多細胞生物の個体は、持続的システムであると同時に、階層的システムでもある。そして、人類のような種も、持続的システムと考えられる[3)]。また後に述べるように、同一生物種が形成する群れや集団も持続的・階層的システムと捉えることができる。

3．種を存続させるための戦略

生物は、さまざまな戦略を用いて種を存続させてきた。脊椎動物の親子関係に関しても、さまざまな形態がある。これは、生物体が自らの子孫を残すために異なる戦略をとるためである。種は、子孫を残すことを通してしか存続できない。哺乳類は、少ない数の子どもを産み、それら子どもを手厚く育てる戦略をとって子孫を残すタイプの生物である。そして人類は、この子育てに特に力を注ぐ生物であり、そこには、生物学的な子育てだけでなく、社会的・文化的子育てとしての教育も加えられている。特に現代人は、子育てに非常に長い時間と労力をさいている。この節では、脊椎動物の種保存戦略の代表的事例のいくつかを記述することにする。

3-1. 種を存続させるために魚類がとる戦略

海は、プランクトンなどの餌や排せつなどに適した環境を魚類に提供する。このような恵まれた環境の中にいるため、孵化してまもない仔魚は、プランクトンの幼生などの餌を得るために自ら移動する必要はほとんどない。魚類の場合には、メスが多くの卵を産み、オスがそれらの卵に精子をかけて受精させ、そのうちの何匹かが成魚へと育っていくのが典型的である。魚の卵には、浮性卵と沈性卵がある。浮性卵は、水に漂い拡散していく（桑村 1988: p. 113）。海の環境は、安定しており、稚魚の餌も豊富である。だから、そのように放置された卵でも、そのいくつかは孵化し、稚魚となり、成魚となる。

受精卵が成魚に育つ確率は極めて低いので、魚は多くの卵を産むことによって子孫を維持している。魚類の生殖に関する戦略は、基本的には、「多くを産み、放任する」ことである。しかし、中には保育行動を示す魚類もある。魚の保育行動は、次の三つに分けられる（桑村 1988: pp. 113-122）。

(3a) ［見張型保護］沈性卵では、好適な産卵場所に産みつけられた方が子の生存率が増す。オスがそのような場所をなわばりとして持ち、そこにメスが産卵し、オスがそのなわばりを守り続ける場合がある。しかし、オスのなわばりが広い場合には、メスが産卵場所を見張るパターンも多く見られる（例：カワスズメ科、モンガラカワハギ科）。「クーヘ」と呼ばれる大型のカワスズメの場合には、一万前後の卵が一度に産卵される。そしてメス親による見張りは、卵、孵化仔魚（卵から３日後に孵化）、遊泳仔魚にいたるまで三ヶ月間にものぼると考えられている。このときオス親は、主に敵からの防衛を担当している（桑村 1988: pp. 16-21）。

(3b) ［体外運搬型］体外運搬型には、口内保育や体表面付着によるものなどがある。口内保育というのは、卵や仔稚魚を親自身が口の中に入れて保育する方法のことである（例：カワスズメ科、テンジクダイ科）（桑村 1988: p. 28）。体表面付着による保護としては、腹面付着（イショウジのオス）、体側面付着（イザリウオの一種のオス）、額付着（コモリウオのオス）、育児嚢（のう）（タツノオトシゴのオス）などがある（桑村 1988: p. 73）。

(3c) ［体内運搬型］サメやエイなどの軟骨魚網に属する魚類は、交尾し、体内受精を行う。卵を産む卵性の種と、子魚を生み出す胎性の種がある。胎性の種では、さまざまな程度で母性から胎児への栄養補給が行われる（桑村 1988: p. 71）。しかし、鳥や哺乳類と異なり、体内受精する魚で出産後の子の保護をする例はほとんどない（桑村 1988: p.121）。

いずれにしても、魚類では、一匹一匹に対するきめ細やかな子育て戦略がとられることはなく、生存の確率は環境と偶然に依存する割合が大きい。爬虫類、鳥類などでは、少なく産んで大事に育てる戦略の方へシフトしていくが、特に特徴的なのは哺乳類における妊娠・出産・子育てのプロセスである。そこでは、母子の間に長期間にわたる濃密な関係が見られる。

3-2. 有袋類の子育て　ー　カンガルーの場合

哺乳類の場合、魚類に比べて、一回の出産で生まれる子どもの数ははるかに少ない。そして哺乳類では、子どもと母親の間に密接な関係が築かれる。哺乳類の子どもは未熟であり、母親（あるいはそれを代行する個体）を欠いてはそもそも生きていけない。こ

の特性は、魚類との大きな違いである。

哺乳類には、大きく分けて、単孔類と有袋類（後獣類）と有胎盤類（正獣類）とがある。単孔類は、カモノハシに見られるように、卵生の哺乳類のことである。有袋類はかつて世界中の広い地域に生息していたが、現在では主にオーストラリア区（オーストラリア大陸とパプアニューギニア等）を中心に生息している。まず、有袋類の代表例としてカンガルーの子育てについて見ておこう。

有袋類では、妊娠時に胎盤が形成されず、子宮内で子どもを育てることもない。そのためカンガルーでは、胎子と子宮壁のゆるやかな接触の中で栄養や老廃物の受け渡しが行われる（長瀬 1999: p. 9）。カンガルーの妊娠期間は、33 日～ 36 日と短い。体長は、２～３ｃｍであり、体重は１ｇ弱しかない。出産直後の赤ちゃんは、母カンガルーの腹をはって嗅覚をたよりに袋（育児嚢）の中まで自力で入り込んでいく。カンガルーの子どもは、母の袋の中にある乳首を吸って育っていくが、６カ月ほどたつと外に時々出るようになる。そして最後には、袋に入れないほど大きくなり、独り立ちをはじめる（長瀬 1999: p. 13）。

有袋類に属するカンガルーの場合、子どもは、母親の体内、育児嚢内、環境内（育児嚢外）という三つの活動相を経験して育っていく。これを、カンガルー個体の個別化の過程として考えてみよう。すると、カンガルー個体の個別化過程が連続的であることがわかる。

受精以前の卵子は、母親の一部と考えていいだろう。しかし受精後は、受精卵は母親とは異なる遺伝子配列を持ち、母親と独立の生物体として存在しはじめる。このときの受精卵の存在は、個体としての地位と母親との融合体の一部という地位の二重の存在論的地位を持つことになる。このときからはじまって、この存在の二重性は成長とともに個別化の方向へ連続的に移行していく。

次の大きなステップは、出産ということになる。出産によって、カンガルーの子どもは空間的に母親から分離され、一定程度の行動の自由を手に入れる。しかし、このときにおいてもなお、カンガルーの子どもは育児嚢の中にとどまり、乳を通して母親から栄養を受けとっており、まだ自立した生物体ではない。

次の大きなステップは、自ら餌を獲得できるときである。このとき、カンガルーの子どもは自立への一歩を自力で歩みはじめる。また母親も、新しい子どもを妊娠し、母親の関心は次の子育てへと向かっていく。

カンガルーの子どもの成長の次のステップは、繁殖能力を持つ大人の個体になることである。このとき、カンガルーは成長のひとつのサイクルを完了する。

3-3. 有胎盤類の子育て　－　ニホンザルの場合

有胎盤類においても、子どもがたどる個体化のプロセスは、カンガルーの場合とあまり変わらない。ただ、そこに育児嚢内で過ごす時期はなく、受精卵は胎盤を通して与えられる栄養を受けとって子宮内で成長し、その後出産される。出産後は、子は母親から

空間的に分離され、より大きな自由度を得るが、食物を自ら獲得することはできず、生き延びるためには養育者に依存するしかない。乳児は、養育者によって生かされている存在者であり、まだ自立した存在者ではない。

有胎盤類にもさまざまなタイプの動物が属している。そして、母子関係の濃密度は一度に出産する子どもの数によっても変わってくる。ニホンザルは一度に一匹を出産するのが普通であるが、豚は一回の分娩で約１０匹を出産する。多くの子どもを出産する哺乳類では、生まれた直後から子どもたちの間で生存競争が始まる。健康で強い子どもでなければ、母親の乳を吸うことに成功して生き延びることはできない。これに対し、一匹しか生まれない種類の子どもの場合には、たいてい、母親に手厚く保護される。例えば、ニホンザルの母ザルは奇形の子ザルでも手厚く育てようとし、子育てを放棄しない（中道 1999: pp. 74-88）。

それでは次に、有胎盤類の例のひとつとしてニホンザルについて考えてみよう。ニホンザルでは、産後しばらくの間は母ザルと子ザルの間に濃密な身体接触状況が見られる。赤ちゃんは、誕生直後に母親によって抱き上げられ、同時に自発的に母親の胸部にしがみつく[4)]。母親は、赤ちゃんを毛づくろいし、抱きしめ、授乳する。赤ちゃんは、母親にしがみつき、吸乳し、最初の一日の大半を眠ることによって過ごすことになる（木村 1983: p. 200）。２日目からは、すでに、自立へ向かっての準備がはじまる。最初の一カ月では、歩行の発達が見られ、二者的遊び仲間関係が形成されていく。母子接触時間は、生後７０日後には約半分となり、１００日後には一定の値に収束する。そしてこの頃から、遊び集団の拡大活発化がなされていく（木村 1983: p. 220）。

ニホンザルの集団では、多数のメスザルとその子どもたちと数匹のオスザルが中心部を形成する。そして、年長の子ザルや若いオスザルが集団の周辺部を形成する。周辺部といっても、中心部を取り囲むようにできているわけではなく、中心部から離れたあちこちで何匹かのオスたちが集まっているというものである（中道 1999: p. 113）。それぞれのサルには共有された順位付けがあり、第一集団には一位オス（アルファオス）が一匹だけ存在する。サル集団というシステムの中では、母子関係はひとつの部分システムに相当する。

ニホンザルの集団は繁殖のためのシステムであり、母子関係はその中で非常に重要な位置を占めている。母ザルは、オスザルと交わり、子を産み、子ザルに乳を与え、生後三カ月間は子育てに特に力を入れる。その後しだいに子ザルは、昼間は母ザルから離れて他の子ザルとともに行動することが多くなる（中道 1999: p. 39）。そして成長していくと、メスザルは集団の中心部にとどまるが、オスザルは周辺部の他のオスザルに合流していく。このように、子ザルと母ザルの関係は、連続的に変化し、しだいに薄まっていく。そして、自らが生殖能力を獲得するまでに成長すると、サルは大人となり、親になる可能性を持つことになる。こうして、サルの成長のひとつのサイクルが完結する。

4．有胎盤類の母子関係の存在論的分析

この節では、第３節で描いた有胎盤類の母子関係を、四次元主義の枠組みを用いて存在論の観点から記述することにする。

4-1. 母子関係システムの分析

四次元主義は、物体を四次元時空に拡がった対象として捉え、そのような対象は時間的部分（temporal part）を持つことができると主張する立場である[5)]。この節では、四次元主義の立場に立って次のような記号を用いることにする：

S_M：（四次元的対象としての）母
S_C：（四次元的対象としての）子ども
P：（四次元的対象としての）胎盤
＋：四次元的対象間のメレオロジー的和（mereological sum）
S_{M+C}：（四次元的対象としての）母子関係システム
$s_x(t)$：時間帯 t におけるシステム S_x の時間的部分

少し、メレオロジーについて説明しておこう[6)]。メレオロジーは、部分全体論を形式的に表現した体系であり、次のような存在論的主張を含んでいる: x と y が存在物ならば、それらの融合体（fusion）x+y も存在物である。だから、メレオロジーを認めると非常に多くのものが存在することになる。

それでは、これらの記号を用いて妊娠から乳児までの母と子の関係を記述することにしよう。子どもが離乳期にいたれば、子どもの母親に対する依存性は大きく減少する。そこでここでは、乳児期までの関係に注目する。以下の記述は、有胎盤類全般に関しても当てはまる。

(4a)［妊娠前（時間帯 t_0）の状態］ $s_M(t_0)$
妊娠前には、後に母になるものしか存在しない。また、$s_M(t_0)$ はシステムである。

(4b)［妊娠時（時間帯 t_1）の状態］ $s_{M+C}(t_1) = s_M(t_1) + P + s_C(t_1)$
妊娠時において、$s_{M+C}(t_1)$ はシステムである。また、$s_M(t_1)$ と $s_C(t_1)$ もシステムである。$s_M(t_1)$ は単独で生存できるが、$s_C(t_1)$ は単独では生存できない。胎盤 P の固有機能は、母体側（$s_M(t_1)$）と胎児側（$s_C(t_1)$）の栄養素、老廃物、ガスの交換にある（酒井 2015: p. 155）。また妊娠時では、$s_{M+C}(t_1)$ はひとつの空間的連続体をなしている。

(4c)［出産直後（時間帯 t2）の状態］ $s_{M+C}(t_2) = s_M(t_2) + s_C(t_2)$
出産直後、$s_{M+C}(t_2)$ はシステムである。また、$s_M(t_2)$ と $s_C(t_2)$ もシステムである。

出産において、$s_C(t_2)$ は $s_{M+C}(t_2)$ から空間的に分岐する。そして胎盤 P は、出産の直後に母体から分離され、与えられていた役割を完了する。出産によって $s_{M+C}(t_2)$ は空間的に分離したシステムとなる。そして出産後、授乳が始まる。

(4d) ［乳児期（時間帯 t_3）の状態］ $s_{M+C}(t_3) = s_M(t_3) + s_C(t_3)$
乳児期において、$s_M(t_3)$ と $s_C(t_3)$ もシステムである。また $s_{M+C}(t_3)$ には、システムと捉えることができる時間的部分とそう捉えることが適切でない時間的部分の両方が含まれている。そして、ニホンザルの場合のように集団生活をする種では、乳幼児 $s_C(t_3)$ は集団 $s_G(t_3)$ というシステムの部分システムとなる。このとき、母子関係のシステム $s_{M+C}(t_3)$ は同様に、$s_G(t_3)$ の部分システムとなる。

(4e) ［乳児期以後の状態］ 母子関係システムは、子供が完全に自立することを目標としたシステムである。だからこのシステムは、子どもが完全に自立した時点で終結する。

システムは、空間的に連続している必要はない。しかし、システムの諸部分は、システムの存続を可能にするような因果関係で結ばれており、そのようにしてシステムの存続を保つものでなくてはならない。

母親と子どもの存在論的関係は、図１のように表すことができる。この図から見てとれるように、$S_M = s_M(t_0+t_1+t_2+t_3+t_4)$ と $S_C = s_C(t_0+t_1+t_2+t_3+t_5)$ が成り立つ [7]。

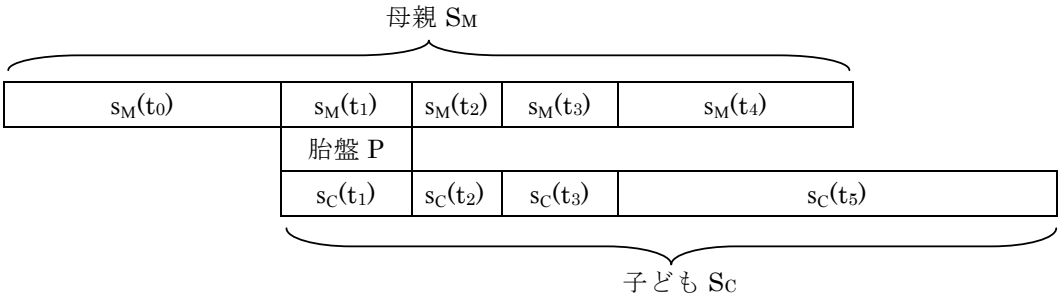

図１　母親と子どもの存在論的関係の時間的描写

図１で示された関係を文章で表すと、次のようになる。

(5a) $s_{M+C}(t_1)$ と $s_{M+C}(t_2)$ と $s_{M+C}(t_3)$ は、S_{M+C} の時間的部分である。
(5b) $s_M(t_0)$ と $s_M(t_1)$ と $s_M(t_2)$ と $s_M(t_3)$ は、S_M の時間的部分である。
(5c) $s_C(t_0)$ と $s_C(t_1)$ と $s_C(t_2)$ と $s_C(t_3)$ は、S_C の時間的部分である。
(5d) $s_G(t_3)$ は、S_G の時間的部分である。

有胎盤類における母子関係システムは、妊娠時において母親と子どもの結合性が最も

強く、出産後は結合性がしだいに薄れていく。この現象は、母子関係システムとして機能している時間的部分の割合が減少していくことでも確かめることができる。

母子関係システムを適切に描写するために、「時間的隙間があるシステム」という概念を導入したい。

(6a) 時間帯 t において s(t) が時間的隙間があるシステムであるのは、t のはじめ t_1 と終わり t_2 では $s(t_1)$ と $s(t_2)$ はシステムだが、s(t*) がシステムでないような t_1 と t_2 の間の時間帯 t* が存在するとき、かつ、そのときに限る。

(6b) 時間帯 t の部分で s(t*) が時間的隙間があるシステムとなるような時間帯 t* が存在しないとき、s(t) を「密なシステム」と呼ぶ。

子ザルが母ザルに養護されている期間 t において子ザルも母ザルもそれぞれ密なシステムだが、彼らが形成する母子関係システムには時間的隙間があることになる。というのも、このような期間では、子ザルは他の子ザルとともに遊んでいることもあるからである。

4-2. 授乳期の分析

授乳期の子ザルは、乳を飲んでいるときや母ザルにしがみついているときなどに母ザルと緊密に接触する。逆に、他の子ザルと遊んでいるときには、母ザルと比較的に距離をとっている。こうして子ザルは、母ザルとの接触と分離を繰り返すが、成長とともにしだいに分離の時間帯が長くなっていく（図２）。

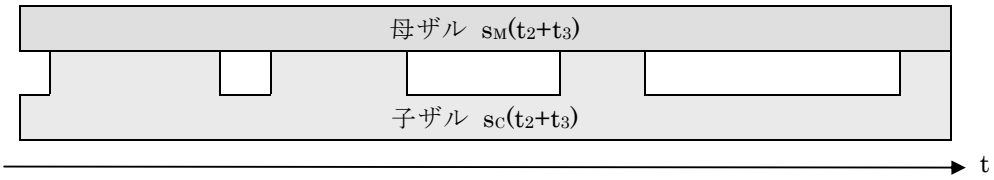

図２　母ザルと子ザルの乳児期における空間的接触と分離

妊娠期には、胎盤を通して栄養素、老廃物、ガスの交換がなされていた。出産後には、授乳を通して子ザルへの栄養素の供給だけがなされる。そして、授乳をしている時間帯には、母ザルと子ザルは母子関係システムとして一体化している。この時間帯には、物質代謝に関する因果作用の循環が母子関係システム内部で成立している。本稿では、受精以後子ザルは母体の中ですでに個体化し存在しはじめているという個体概念を用いている。ただしこのとき、子ザルの存在は二重化しており、個体としての子ザル（$s_C(t_1)$）と母子関係システム（$s_{M+C}(t_1)$）の部分としての子ザルの両方について私たちは語ることができる。また妊娠時には母ザルに関しても、母ザル自身（$s_M(t_1)$）と母子関係システム

（$s_{M+C}(t_1)$）の部分としての母ザルという存在の二重化が成立している。

授乳状態では、母と子に関するシステムが多重化している。このようなとき、母ザル個体（$s_M(t_2)$）としてのシステムと子ザル個体（$s_C(t_2)$）としてのシステムと母子関係システム（$s_{M+C}(t_2)$）が共存している。母ザル個体には、子ザルを育てる直接の利益はない。しかし、母子関係システムが自らを存続させるために活動していると考えるなら、この包括的システムには利益がある。授乳状態で母ザルは、母子関係システムの一部として活動していると解釈できる。そして、このようなタイプの活動があるからこそ、ニホンザルという種は存続できている。そしてこのことは、一般に、哺乳類全体に当てはまる。

子どもを少なく産み手厚く育てるという繁殖戦略をとった哺乳類にとって、養育者が持つ自己犠牲的子育ての特性は種の存続のかなめになる重要な特性である。

５．人間の母子関係の存在論的分析

人間においても存在論的規定は、有胎盤類の図式に従っており、図１や図２で描写した関係が成立している。ただ、人間の場合には、生物学的要素に、心理的要素と社会的要素が新たに加わる。このため人間の場合には、乳幼児の分離と個別化のプロセスは、空間的だけではなく、心理的・社会的にも考える必要が出てくる。実際、小児精神病の研究者マーガレット・マーラーは乳幼児の心理的誕生に注目している。乳児の母親からの出産による肉体的分離は、乳児自身の心理的理解とは一致しない。乳幼児の個体化へのプロセスは、自己理解形成という心理的プロセスを含んでおり、出産を通してはじまる長い分離過程と重なっている。

> 「乳児の生物的誕生と、個体の心理的誕生は時間的に一致していない。前者は劇的で可視的であり、十分に定義できる出来事であるが、後者はゆっくりと展開する精神的過程である。」（Mahler et al 1975: 邦訳 p.10）

子どもがシステムとして自立する以前に、母子関係システムが作動し、子どもの生存を支えている。妊娠時においては、母子関係システムは生物学的メカニズムを通して自動的に維持されていた。出産後は、母子関係システムは母親の意図によってコントロールされるようになる。言い換えると、母親は意図的に乳児の生存を支えようとする。あるいは、母親のそのような意図があってはじめて乳児は生き続けることができると言ってもよいだろう。出産直後は、母親というシステムと母子関係システムが支配的であり、特に人間の場合、乳児としての子どものシステムは不十分にしか機能していない。つまり哺乳類の場合、子どもは極端に未成熟な生物体として生まれてくるのである。

子どもを育てるとき、母親は自らを子どもの生存維持のための道具的存在者として意図的に位置付ける。普通、人間は自分以外のものを道具として利用する。しかし、子育

てにおいては、道具と養育者との関係は反転する。養育者は、子どもの生存を目的とし、自らをその目的のための道具として位置付ける。乳児の生存を維持するために、母親は自分中心ではなく、子ども中心の生活を営むようになる。そして、この性向は種の存続のために極めて重要な役割をはたしている。このような母親の自己犠牲の姿勢は、哺乳類に多くみられるものであり、生物学的特性である。

子どもの自立は、母親を子育てから解放する。子どもが自立化をすすめれば、母親も同時に自立化をすすめていかねばならず、道具的存在者としての自己を解放し、自らの目的に従って生きる道を切り開いていかなければいけない。だから、子どもが成長するプロセスは、同時に、母親が個体としての自分を取り戻すプロセスでもある。かつては、母親は 10 人もの子どもを産み、子育ての期間は 20 年にもわたるものだった。人生が短かった時代には、母親にとって子育ては人生の後半部のほとんどを占め、子どもから自立する必要はほとんどなかっただろう。少子化にともない、子育ての終結の後に母親には長い人生が残されることになった。

6．子を失う喪失感

人間の場合、子ども S_C も母親 S_M も、家庭 S_F というシステムの部分システムとなる。このとき、母子関係システム S_{M+C} も家庭 S_F の部分システムとなる。家庭がひとつのシステムである以上、家庭の中のひとりの構成員の死は、そのシステムにとっての危機を意味する。特に、母親が子育てをしているときに子どもが死ぬことは母親にとって大きな損失となる。というのも、母親は子どもの生存のために自らを道具化しており、その喪失は母子関係システムの完全な崩壊を意味するからである。

重要な人との死別を成人が経験するときの典型的プロセスを、精神分析家ジョン・ボウルビイは次のようにまとめている（Bowlby 1979: 邦訳 p. 117~119）。

(6a)［麻痺期］ 重要な人の死を受け入れることができない時期。通常数時間から一週間続き、極度に強い悲嘆や怒りの爆発で中断される場合もある。

(6b)［失った人を思慕し探し求める期］ 死の知らせの数日後から一、二週間後に現れる。これは数カ月からしばしば数年にわたる。

(6c)［解体と絶望期］ うつ状態になったり、情緒不安定になったりする場合がある。

(6d)［再編成期］ 程度はさまざまである。

第５節の考察に従えば、人間はひとりで生きているのでなく、システムの中で他の人間とともに生きている。そして個人の生は、自分を含んだシステムの維持・変化と結びついている。重要な人の死は、自らが属していたシステムの大規模な変更をしばしば含み、それに影響されて、自らが生きる意味も変わってくる。

死が自らの幼い子の死である場合は、なおさらである。幼い子は、養育者とのシステムの中に含まれてはじめて生存が維持されているような存在者である。第５節で述べたように、養育者は自らの存在を子どもの生存に対して道具的に位置付けている。このとき子どもが死ぬなら、養育者が激しい喪失感を感じるのは当然である。養育者は、生きる意味を（少なくともしばらくの間）見失うだろう。

また家庭の大黒柱である人の死は、家庭というシステムの維持に大きな影響を与える。それは、「この役割を誰が肩代わりすればいいのか？」という問題を残された者たちにつきつける（Bowlby 1979: p. 141）。ここには、社会的要因も関わってくる。現代社会では、家庭システムの維持には経済的要因が深く関わっている。自分の夫を若くして失った妻には、家庭システムを維持して子育てを続けるための資金を（自分が生きている社会の中で）いかに捻出するかという問題が現れる。家庭システムは、それが属する社会システムの部分システムであり、社会システムの存続は経済的要因と強く結びついている。

事故や災害などによって突然に子供を失う喪失感は、存在論の観点からも説明できる。現代人は、少ない数の子どもを産み、それらの子どもを大切に育てることで社会を維持してきた。だから現代に生きる親にとって、子どもの存在意義は非常に大きなものになっている。

７．結論的考察

母子関係の存在論の分析が示すことは、人間を孤立した存在者として一貫して捉えることの不十分性である。母子関係システムは、生物学的起源を持っている。生物学的にも、子どもは自立へ向かってのプロセスを長い間続け、母親は子どもとの分離のプロセスを徐々に完成させていく。また人間の母子関係システムには、心理的・社会的・経済的要因が関わってくる。私は、中山（2015）でデカルトが前提にしたような個人の存在の自己根拠性に対して批判を行った。自己根拠性を内に秘め、思考によって自ら決断する個人像は、ヨーロッパ近代が産みだしたひとつの虚構である。人間は、さまざまなシステムの中で生きている。本稿も、生物学的観点と存在論的観点から、人間存在の他者との関係性を描く試みのひとつとして位置付けることができるだろう[8)]。

注

1）この 2.1 節での議論は、2014 年 11 月 16 日の日本科学哲学会第 47 回大会での口頭発表「生物の存在論と人工物の存在論」に基づいている。

2）四次元的個物は、時空的に拡がっており、時間的部分を持つことを特徴としている。詳しくは、中山（2009, 2014）や Sider (2001) を参照のこと。

3）マイケル・ギセリンは、種の個体説を唱えている（Ghiselin 1974）。この立場は、本稿の存在論に近いものである。本稿の用語に従えば、種の個体説とは種をある特定の

性質（種に属する成人の生物個体間での交配可能性などの性質）を持つ持続的システムとして捉える説である。

4）ニホンザルの場合、生まれた直後の赤ちゃんでも四本の手足の指のしがみつく力はしっかりしている（中道 1999: p. 30）。

5）四次元主義とメレオロジーについては、中山（2009, 2014）や Sider (2001) が参考になる。

6）メレオロジーと存在論を古代から現代まで論じた論文集に、松田（2014）がある。

7）t_1+t_2 などと書くときも、+ はメレオロジー的和を表わしている。この見解は、時間的対象も四次元的具体的存在物として扱う四次元メレオロジーの考えに基づいている。なお、四次元メレオロジーの体系は中山（2009）の第２章３節に記述されている。

8）本稿の研究は、平成 27 年度ヒューマン・サイエンス・プロジェクト「利他主義の人間科学の推進」および科学研究費補助金・基盤研究 (Ｃ)（課題番号 24520014, 平成 24 年度～平成 28 年度）の支援を受けている。ここに記して、感謝したい。

文献表

Bowlby, J. (1979), *The Making & Breaking of Affectional Bonds*, Tavistock Publications（= 1981, 作田勉 監訳『ボウルビイ　母子関係入門』星和書店）

Cummins, R. (1975), Functional analysis, *The Journal of Philosophy*, vol.72-No.20, pp. 741-765.

Ghiselin, M. T. (1974), A Radical Solution to the Species Problem, *Systematic Zoology*, 23,pp. 536-544.

木村光伸 (1983),「７．　ニホンザル未成熟個体の社会的行動」, 日高敏隆 編『動物行動の意味』東海大学出版 , 197-221 頁

桑村哲生 (1988),『魚の子育てと社会』, 海鳴社

Mahler, M. S., Pine, F. and Bergman, A. (1975), *The Psychological Birth of the Human Infant*, Basic Books: New York（=1981, 高橋雅士ほか訳『乳幼児の心理的誕生　－　母子共生と個体化』黎明書房）

松田毅 編 (2014),『部分と全体の哲学　－　歴史と現在』, 春秋社

Millikan, R. G. (1989), In Defense of Proper Functions, *Philosophy of Science*, 56, pp. 288-302.

Millikan, R. G. (2002), *Varieties of Meaning*, The MIT Press: Cambridge MA（= 2007, 信原幸弘 訳『意味と目的の世界』勁草書房）

長坂一郎 (2014),「機能のオントロジー」, 松田 (2014), 229-259 頁

長瀬健二郎 (1999),「カンガルー」和秀雄 編『どうぶつの妊娠・出産・子育て』メディカ出版 , 8-13 頁

Nakayama, Y. (2013), The Extended Mind and the Extended Agent, *Procedia Social and Behavioral Sciences*, vol. 97, Elsevier, pp. 503-510.

中山康雄 (2009),『現代唯名論の構築　―　歴史の哲学への応用』, 春秋社

中山康雄 (2011a),「形而上学から科学技術論へ」, 戸田山和久・出口康夫 編『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社 , 60-70 頁
中山康雄 (2011b),『規範とゲーム　ー　社会の哲学入門』, 勁草書房
中山康雄 (2014),「四次元主義の存在論と認識論」, 松田 (2014), 137-161 頁
中山康雄 (2015),「利他主義と共生に関する哲学的分析」,『未来共生学』第 2 巻 , 49-62 頁
中道正之 (1999),『ニホンザルの母と子』, 福村出版
信原幸弘 (2007),「訳者解説」R. G. ミリカン『意味と目的の世界』勁草書房 , 339-361 頁
酒井仙吉 (2015),『哺乳類誕生　乳の獲得と進化の謎』, 講談社
Sider, T. (2001) *Four Dimensionalism : An Ontology of Persistence and Time*, Oxford University Press: Oxford（= 2007, 中山康雄 監訳 , 小山・齋藤・鈴木 訳『四次元主義の哲学　―持続と時間の存在論』春秋社）

An Ontological Analysis of the Relationship between a Mother and her Child

Yasuo NAKAYAMA

From an ontological viewpoint, the relationship between a mother and her child is especially interesting. During a pregnancy, the mother and her child are spatially continuous. After the birth, a separation process between them begins. This process is temporally seamless and coincides with the individuation process of the child. To analyze this separation process, we use an ontological framework, i.e., *four-dimensional mereology* described in Nakayama (2009, in Japanese).

Vertebrate animals take different strategies in order to preserve their own species. Fishes produce a huge amount of offspring, but only some of them become mature. In contrast, mammals produce only a small number of children and bring them up very carefully, so that the survival rate becomes high. For this reason, the mother-child-relationship is especially strong for mammals. As examples of mammals, we describe child rearing of kangaroos and Japanese macaques. We introduce, then, a concept of *system* and analyze the relationship among a mother system (S_M), a child system (S_C), and a mother-child system (S_{M+C}).

For humans, beside the biological process of individuation, we should take a psychological and a social process of individuation into consideration. The biological individuation starts with the birth of a child. However, the psychological and the social individuation take a long time before they are completed. We also discuss death of a child. In a mother-child system, survival of the child is one of its goals. So, the mother continues to perform actions in order to achieve this goal. Thus, when a child dies, the mother-child system totally collapses and the mother loses one of her goals of life.

The discussions in this paper show that it is not appropriate to treat humans as isolated beings. They are often involved in systematic interactions among them. Sometimes, their behaviors can be properly explained by interpreting them as components of one system.